

描かれた三十六歌仙

三十六歌仙は、平安中期の公家で優れた学者・歌人であった藤原公任(966-1041)が撰び、優れた歌人の代表として位置づけられました。また画題としてもしばしば取り上げられ、歌仙絵と称されました。歌仙絵は鎌倉時代より盛んに制作され、額にして寺社に奉納することがたびたび行われています。

玉津島神社の三十六歌仙額は、奉納者が紀州藩初代藩主・徳川頼宣公で、絵は藩お抱えの御絵師・狩野興甫が描いています。また、歌仙の歌および名前を京都の公卿・門跡が筆耕しています。全国に残る歌仙絵の中でも特に優品と評価され、狂言「歌仙」の舞台にもなりました。

玉津島神社蔵の三十六歌仙額は、2015年に和歌山市指定文化財に登録されました(現在は和歌山市立博物館で保管、拝殿には複製を掲出)。

拝殿ご案内

拝殿は、紀州初代藩主・徳川頼宣公御寄進で、舞殿(まいどの)とも歌仙殿(三十六歌仙を飾ったため)ともいいます。現在の建物は約100年前に再建されたものです。

玉津島神社御神輿は、明和4年(1767年)、後桜町天皇の執政関白近衛内前(このえうちさき)が、寄附・奉納したもので、京都の神輿師桑嶋作右衛門の作によります。

奉納後、後桜町天皇は聖武天皇の故事にならい、春秋二時に祭祀を斎行、その際この御神輿を用いられたことが記録されています。2013年に県美術工芸品(工芸品)に指定されました。

扁額「南無玉津嶋明神」は戦国時代、能書家で知られた後奈良天皇による御宸筆です。それ以降も皇室は玉津島神社に直筆の書や和歌を奉納しました(現在は和歌山市立博物館で保管)。

石灯籠は、16枚の菊の御紋が入った霊元天皇奉納と徳川頼宣公奉納のものが現存します。

拝殿右奥の「聖武天皇詔」の書額には、1300年前の行幸の際に発せられた、和歌の浦と玉津島神社の縁起が明記されています。和歌山市出身の書家・松村博峰先生(青潮書道会理事長・日展特選2回)による揮毫で、2022年に和歌の浦三社(玉津島神社・和歌浦天満宮・紀州東照宮)に同時奉納された作の1つです。



玉津島神社・鹽竈神社

〒641-0025 和歌山県和歌山市和歌浦中3-4-26

TEL. 073-444-0472 (午前9時～午後5時)

<http://tamatsushimajinja.jp>



公式HP



Instagram

Tamatsushima-jinja Shrine



玉津島神社

三十六歌仙額

柿本人麿（かきものひととまろ）

あかしの浦の朝ぎりに

島がくれ行舟をしぞ思ふ

古今和歌集 卷九四〇九獨旅歌



凡河内躬恒（おほしうちのみつね）

いつことも

春の光はわかなくに

まだみよしの山は雪ふる

後撰和歌集 卷一九春上



大伴家持（おほとものやかもち）

春の野に

あさる雉の妻恋に

己が在りかを人に知れつつ

拾遺和歌集 卷二二春上



在原業平朝臣（ありわらのなりひらあそん）

世中に

たえてさくらのならりせば

春の心はのどけからまし

古今和歌集 卷一五三春歌上



素性法師（そせいほうし）

見わたせば

柳さくらをこきまぜて

宮こそ春の錦なりける

古今和歌集 卷一五六春歌上



猿丸大夫（さるまるだゆう）

奥山に

紅葉ふみわけ鳴く鹿の

こゑきく時ぞ秋はかなしき

古今和歌集 卷四二五秋歌上



紀貫之（きのつらゆき）

桜散る

木の下風は寒からで

空に知られぬ雪ぞ降りける

拾遺和歌集 卷一六四春上



伊勢（いせ）

三輪の山

いかに待ち見ん年経とも

たづめる人もあらじと思へば

古今和歌集 卷一五七八〇恋歌五



山部赤人（やまのあかひと）

若の浦に

潮満ち来れば渴を無み

葦邊をさして鶴鳴き渡る

万葉集 卷六九一九



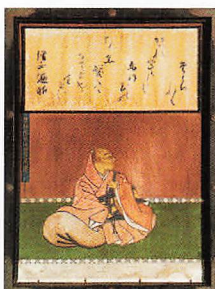
僧正遍昭（そうじょうはんしょう）

たらちめは

かれとてしもむばたまの

我が黒髪を撫ですや有けん

後撰和歌集 卷一七二四〇雜三



紀友則（きのともり）

秋風に

はつかりが音ぞきこゆなる

誰がたまづさをかけて来つらん

古今和歌集 卷四二七秋歌上



小野小町（おののこまち）

色見えて

うつろふ物は世中の

人の心の花にぞありける

古今和歌集 卷一五七九七恋歌五



兼輔朝臣（かねすけあそん）

人の親の

心は闇にあらねども

子を思ふ道にまどひぬる哉

後撰和歌集 卷一五二一〇雜二



中納言敦忠（ちゅうなごんあつただ）

逢ひ見ての

後の心にくらふれば

昔は物を思はざりけり

拾遺和歌集 卷一五二七二恋二



源公忠朝臣（みなもとのかんたであそん）

行やらで

山地暮らしつ郭公

今一声の聞かまほしさに

拾遺和歌集 卷一六〇六夏



斎宮女御（さいぐうのによろこ）

琴の音に

峰の松風通ふらし

いづれのをより調べめけん

拾遺和歌集 卷一八四五一雜上



藤原敏行朝臣（ふじわらのとしゆきあそん）

秋きぬと

日にはさやかに見えねども

風のをとにぞおどろかれぬる

古今和歌集 卷四一六九秋歌上



源宗于朝臣（みなもとのおねゆきあそん）

常磐なる

松のみどりも春くれば

今ひとしほの色まさりけり

古今和歌集 卷一四四春歌上



中納言朝忠（ちゅうなごんあさただ）

逢ふ事の

絶えてしなくは中に

人をも身をも怨ざらし

拾遺和歌集 卷一六七八恋二



藤原高光（ふじわらのたかみつ）

かく許

へがたく見ゆる世中に

うら山しくもする月哉

古今和歌集 卷一五二七二恋二



壬生忠岑（みぶのただみね）

晨明の

つれなく見えし別より

暁許うき物はなし

古今和歌集 卷一三六五恋歌三



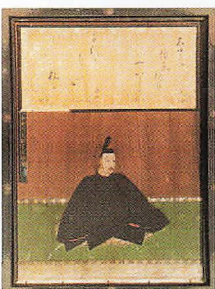
大中臣頼基朝臣（おほなかつのみもとあそん）

一節に

千世をこめたる杖なれば

つくともつきじ君が齢は

拾遺和歌集 卷一五二七六夏



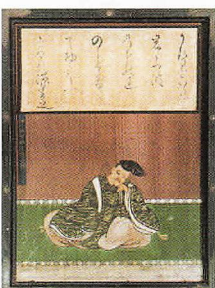
源重之（みなもとのおしげゆき）

風をいたみ

岩うつ波のをのれのみ

くだけてものをおもふろかな

詞花和歌集 卷二二二恋上



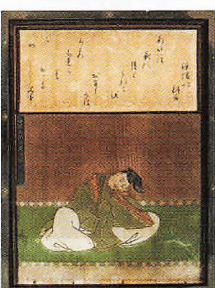
源信明朝臣（みなもとのおのさねあそん）

あたら夜の

月と花を おなじくは

あはれ知れ覽人に見せばや

後撰和歌集 卷一〇三三春上



藤原清正（ふじわらのきよただ）

あまつかぜ

ふけるの浦にゐる鶴の

などか雲井に帰らざるべき

新古今和歌集 卷一八七三雜歌上



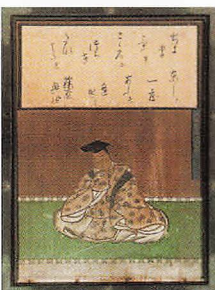
藤原興風（ふじわらのおきかぜ）

契剣

心ぞつらき織女の

年にひとたびあふはあふかは

古今和歌集 卷四一七八秋歌上



坂上是則（さかのうえのこれのり）

みよし野の

山の白雪つもるらし

古里さむく成りまさるなり

古今和歌集 卷六三二五冬歌



三条院女藏人左近（さんじょうのむねとら）

岩橋の

夜の契も絶えぬべし

明くるわびしき葛木の神

拾遺和歌集 卷一八二〇一雜賀



大中臣能宣朝臣（おほなかつのよしのあそん）

千とせまで

限れる松も 今日よりは

君に引かれて 万代や経む

拾遺和歌集 卷一二四春上



平兼盛（たいらのかねもり）

暮れてゆく

秋の形見に置く物は

我が元結の霜にぞ有ける

拾遺和歌集 卷一二四秋



源順（みなもとのおしと）

水の面に

照る月波をかぞふれば

今宵ぞ秋の 最中なりける

拾遺和歌集 卷一七二秋



清原元輔（きよはらのもとすけ）

音無の

川とぞつみに流れける

言はで物思ふ人の涙は

拾遺和歌集 卷一三二七五〇恋二



藤原元真（ふじわらのもとまね）

夏草は

しげりにけりなたまほこの

道行き人も 結ぶばかりに

新古今和歌集 卷三八八夏歌



藤原仲文（ふじわらのなかふみ）

有明の

月の光を待つほどに

我が世のいたくふけにける哉

拾遺和歌集 卷一八四三六雜上



壬生忠見（みぶのただみ）

恋すてふ

我なはまたき立にけり

人知れずこそ 思ひそめしか

拾遺和歌集 卷一六二二恋二



中務（なかつかき）

秋風の

吹くにつけてもとはぬ哉

萩の葉ならば 音はしてまし

後撰和歌集 卷一三八四六春四

